

小田原史談

第26号 談会
小田原一丁目
小田原市文化館
発行所 小田原市
小田原市文士会
小田原市文士会

印刷の御用は
清水印刷

小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番

故吉川英治氏と天守閣

清水 専 吉 郎

小田原城天守閣和歌集を編むべく、天守閣櫓再建の昭和三十五年五月に思い立ち、先ず歴代城主北条氏・阿部氏・稲葉氏・大久保氏の後裔を探し求めて天守閣の和歌を頂き、なお当地在住の名士や縁故ある方々及び地方一般と学校教員生徒の作歌を集め、私も十六代前祖先の清

水上野介と右近将監が北条氏と小田原城に關係がありま
すので三百余首を作り、巻頭に歴代城主、歌人の武
島羽衣、川田順氏や長谷川如是蘭、吉川英治、鈴木英雄
の各名士、並びに泉歌人会委員諸氏の詠歌を掲げ鈴木小
田原市長の序文を得て一冊の本にいたしました。天守閣
再建の記録を永久にとどめたい微意に外ありません。
其の過程に吉川英治氏を訪ねる一事があります。それ
は本年九月十日の朝日新聞に「吉川英治の歌と句」とし
て遺墨展の記事中に偶々天守閣詠に私が頂いた

小田原やここ父祖の地と聞くからに

松のすがたもたれやらに似る

小田原やここ父祖の地
と聞くからに
松のすがたもたれやらに
似る

という歌が掲載されてあります。そのこと
を養田長平氏から知らせられ、当時の模様
を書いたらと言われたのでそのままを記し
ます。

吉川英治氏の祖先は小田原に在り、その
菩提寺が正恩寺である事を小田原市社会教
育課長から知らされ、又吉川英治氏が十才
前後の幼少の頃小田原にて竹馬の友を現彫
刻家の米山鳳雲氏に聴き、正恩寺の住職鞠
川康英師を通して再建天守閣の和歌を依頼
しておきました。

昭和三十一年一月最早歌稿の集りも終末
に近くなつたころ、鞠川師から話は通して
ありますから青山の吉川邸へお出かけなさ
いと言われたので、いまままで吉川先生が私
本太平記を毎日新聞へ執筆中の最中で遠慮

していたのを一月二十六日青山御所前の港区赤坂新坂町
のお住居をお訪ねしました。高台の庭のよい眺望が展げ
て見えるすぐれたお屋敷でした。応接間で暫らく待つ間
に温い甘酒を出され、極寒の折柄これで寒さもやわらぎ
ました。甘酒は靴の粒が残るものですが、それが解けて
いて、少しもかすが残らず、程よい甘さでおいしく、お
代りがほしい位でした。「甘酒をたまひて真冬暖たけれ
吉川邸に歌を待ちつつ……」と即詠の短歌に味をとどめ
ました。

大色紙に同じもの二枚即席にお認め下さって正恩寺に
一枚は届けてくれとの仰せで頂戴しました。今となって
は誠に小田原城天守閣和歌集に光彩を添えることになり
私もこの歌を額に掲げて腕に「天守閣箱根足柄屏風して
いらかの先に相模海原」と私の歌を添えて日常天守閣の
見える二階に掲げて朝夕ながめております。

国生みのこころ

田 尻 隼 人

若人は
さすらひの旅にありけり
底しれぬ思索の沼の
悩みより脱れんものと。

見はるかす
初秋の暮れゆく野への
をちこちに村人むれて
孜々として働くが見ゆ。

生き生きて命あるごと
国造り大いなるわざ
ここにこそ培はれなむ。
かしこくも

神つ御代国生みの道
建てませる深きみ旨の
ほのぼのと今にして知る
もろびとよ
真心を一つに統べて
たくましくはた麗はしく
文化なす国生みせばや。
いつしかも
ぬばたまの闇路をゆけど
若人のこころのうちに
あかあかと灯はともりけ
り。

(詩人)

柿・野菊

内山 雷軒

千代の里は、曾我に近い小丘で、奈良を小さくしたようなところ、寺々が多くそこからの富士・箱根は格別。

秋深い十一月十六日の夕ぐれどき、国府津海岸に立止り、西の方はと、眺むれば、双子山に、日が落ちかかり、空は茜色、富士は雲の中

やがて、寺に到着して驚いた。酒肴・刺身・湯どうぶ・お手製の寿司、土地の郷土史家、内田武雄さんという人も待っている。

喰べ物を出され、尻込み習慣のわたくし、ありがたや、情けなげと、目をパチクリ、どうぞ一枚の柿だけに、ただ申訳なく、言いわげばかり。

次第に迫るたそがれの中を、内田氏の案内で、かねて心がけていた、池鏡山長立寺のあとに立つ。相模灘出漁の漁師達が目標としていた夜光る竜灯の松、二本はあと方もないが

の梅。まこと、銷魂の極みは朝と夕。併し比企の局は武士の妻道心堅固、ひたすら誦教おこたらないため、頼朝しは、長立寺迄出向いたといふ。寺の鐘、それが火災で泥田に落ちた。火災は明治の初めらしく、睡に二、三本木のあるところ、それがその場所。矢作の浅間の森はとっぷりと暗く、稲荷(とうか)の森の向うが勝福寺。勝福寺にも鼠小僧の墓があるそう。

は心を寒くする。(千代と高田は米どころ娘やりたや、婿ほしや)

これは、米どころを意味し小田原北条方に男子が徴用された時のもの、今でも米の生産地。間もなく円宗寺に戻った私は、懐中電灯を持って、手さぐりに折りくれた枝つきの柿を、手に持てないほど、それと長立寺跡で摘んだ、可憐な野菊に、薄命の少女、乙姫もしのび、一生を尼でくらし、ひたすら冥福を祈り通したという比企の局の身の上を思い馳せらる。

だが、長立寺の住職も、男に変わり、土地の娘と恋愛して、番傘一本で追い出された者があると聞き、猫にかつおぶしては仕方があるまい。坊さんも生身の人間と同情した。

註・雷軒氏は随筆家として有名、その著書も多い私は小川良山君の紹介によって知り、永い間懇交を續けている。この随筆は本年八月著「花水川」より転載せるもので、紙面の都合上半を省略したことを諒せられたい。(斐田)

比企の局は、妙法という尼となり、池鏡山長立寺に庵をくんだのである。それからいくとせの永い星霜。秋、月芽えて、雛菊の美しいのが、一面野を埋める頃は、柿が枝に赤く別所山に白く、かすむのは、早春

小泉という旧家の前を行くと丘の下が田、その土壌を深く掘ると水が吹き出るしかし水田となっている一部分に、むかしは家があったらしく、土器とか、くりくるみの木の根が出て来てくるみを焼いて喰べた残りがある、底深くあると内田氏は説明した。

道灌は、千代の丘に、岩を構えていたという、うわさ。だが、世の中は、皮肉なもの、道灌に手をかけたのは、目と鼻の先に住む、下曾我、曾我兵庫守と聞いて

酒匂川・連歌橋

内田 武雄

古くは丸籾・丸子川・円子川と称えた。鎌倉時代、十六夜日記の作阿仏尼が、建治二年十月十八日「丸子川」といふを、いとくらくて渡る」と同日記中に書いている。

江戸時代になっても酒匂川は、大井川と共に江戸城防備のための架橋、渡船を禁じて徒歩のみを許した。広重画く東海道五十三次酒匂宿の図にも、この川越の様子が見えてある。酒

話のひろば

断髮令が出たのは明治四年八月九日、チョンマゲに未練を残す男たちは大恐慌を来して、中には大いに奮慨して滑稽きわまる語り草がいまにも残っているがこれとは反対に女の方ではドンドシ緑の黒髪を切って大道を歩した。

女の断髮禁止

明治五年の新聞雑誌にこんなことが記されている。近頃府下に女子の断髮するものがあった。醜態陋風を見るに忍びず。女子は柔順温和を主とせねばならぬのに、やたら黒髪を切り捨て、文明開化の姿とか、色気を離れるとかで、すました顔は片腹痛い云々

しかし女の断髮はいよいよ流行の度を加え、遂に政府も禁止令を出し罰金刑を科するに至ったが、これに対して「男に断髮を許し女にこれを許さぬのは怪しからぬ」と男女同權論も飛び出して、怪気焰をあげている変われば世の中である。

句橋の東、国道酒匂橋に隣接して連歌橋がある。建久元年源頼朝上洛の途次、尾原景時の馬が、波を蹴つて水でかけ機嫌を損じた。そこで景時は「円子川けれど、そ波はあがりける」と発句。頼朝は気色を直して「かかろあしくも人あ見るらん」と脇句をつけたと、源平盛衰記に見える。連歌橋の名が残る所以である。

山彦山の句碑
ほととぎす鳴々飛んで
いそがし 芭蕉
人も知る曾我中村や青嵐
白雄

政府でもこれを見かねたものと見えて、同年四月左の達示が発せられた。散髮の儀は勝手たるべき旨先般御布告相成専ら男子に限る。近來婦女女子の中にもザンギリの者相見え必竟御趣旨を取違え、儀に可有之(中略)女子の儀は従前の通りに心御趣旨を取違えぬ様可云々。

忠臣蔵始末記

赤穂記を発見

(日本海新聞) 忠臣蔵であまりに有名な四十七士についての話題は尽きないがこのほど浪士の討入り二年後に書かれた記録がみつかり、また話題をにぎわしている。

鳥取県倉吉市宮川の県教育研究所長補佐、早川速雄氏の自宅より発見されたもので「赤穂記」といい二五八年前に書かれたものである。早川家の系図をたどって見ると、れっきとした旗本で、元禄から宝永時代にかけては御書院番頭の役にあつたと伝えられている。古ツヅラの中から参勤交代伝達書などの古文書などの古文書と一緒に、当時のもようを物語る赤穂記が出てきたもので、それを見ると今まで一般に知られていない武功記とはかなり違った義士たちの内面の姿が浮き彫りされている。記録は五十ページにわたるもので、赤穂浪士の討入り当日と、その前後の行動から細川・松平・水野・毛利の四家に分散してあすけられ、翌年二月に切腹するまでの様

子が詳しく書き残されている。とくに後半の記録では四十七士の裏面や、その家族の全部の男子が島流しの刑に処せられたこと、吉良一族の処分と付けた人の討死に、さらに赤穂家臣の脱落者の顔ぶれから、当時のかわら版の題材の取り上げ方一般庶民の討ち入りをテーマにした狂歌。ならびに八景詩を製作した吉良家に対する見方など興味深いもので貴重な資料として関係者のあいだに話題を呼んでいる。この記録によるとまず討ち入り当日の行動について次のように記されている

「十二月十四日、早天より長短の家臣四十七人は、芝高輪泉岳寺に詣り、和尚に浪人で住めなくなった」との理由を告げ、さらに「近日思ひ立って他国に行くついでに寺で殿の菩提をとむらってほしい」と銀子三十枚を渡し、昼ごろまで同寺にとどまり、同夜本庄(所不明)に集まった(中略)討ち入りの時の服装は黒の木綿の羽織りなど(略)えりに木札(名札)をつけ各自が所在を知らせ合うため呼び子の鳥笛を懐中した」とある。この記録に

よると討ち入りの時のいでたちは地味で山と川の合言葉などのことは記されていない。さらに吉良をさがす顛末では「穴蔵様の小部屋が戸がガタガタと鳴ったので大石主税がその戸を開け、間十次郎が槍で吉良の額を突き、その場で首級を上げた」とあり、切腹を迫ったようなことは記されていない。

このあと細川家に大石良雄ら十七人、松平家に大石主税ら十人、水野家に間十次郎ら六人、毛利家に岡嶋八十右衛門ら十人があつて討ち入りした。翌二日切腹と同時に大石良雄の二男吉千代、十三才、同三男大次郎、二才など討ち入りに加わった四十六人の家族のうち二十才から二十五才までの男子十九人が遠島刑に処せられている。この討ち入りに対する当時の批評は儒学者や幕臣の間で賛否両論のまじり合ったと伝えられているが、一般庶民の間では封建的な身分制度のワタに苦悩する日ごろのウツブンをはらす快挙として人気があつたことを裏付ける記録が多い。当時の「かわら版」では「さても本庄の夜討ち終

わりしが、浪人方の間十次光輿申すよう、奇異な老人と組みみて首を取り候。上野かと思れば次に人もなく、また番人かと思えば下着に白ムクをつけた「な、な、な、のれとせむれどもついにな、のれず……」と事件を興味津々とし盛り上げて義士の動きを伝えている。また庶民間に歌われた狂歌にも「アサノ間の内匠ニ首を切ラレケリ、ムカシハ高家今はハヤオケ(原文のまま)」などの十首にわたって当時の庶民感情を盛っている。このほか八景詩を製作したもので遠寺晚鐘を「泉岳寺晚鐘」瀧湘夜雨を「小将夜首」洞底秋月を「当分明家」などがあり、さらにそれを親切に解説して、当分明家は「吉良家の番人が切られて門を閉じたためネズミがふえ、近所のご用聞きが困っている」といった意味で赤穂家臣討ち入りのその後を伝えている。(内田記)

原歌午前九時出發。ます網一色の新田義貞公の首塚に一同おまいりをすませ、その場において中野先生より延元二年七月二日義貞越前藩島にて討死後宇津宮將監泰藤ならびに義貞のめかけ原沢氏の手によって当地に祀られたお話しをうかがった。宇津宮氏の子孫が即ち後の小田原藩大久保侯である。なおパスの中にて文政元年十一月領主大久保忠真公の孝子、節婦、奇特者の表彰が酒匂川で行なわれた時、二宮金次郎も亦その内に加はったお話しなどうかがいながら、ついた所が国府津の宝剛寺。ここで多数の神奈川県の重要文化財ならびに裏山の中腹にある建武の古碑の説明を足柄平野が一目に見えるところで、ありし日の昔を思い浮かべながらおうかがいする事が出来た。

宝剛寺においてお茶のごちそうになって、パスはこれより下曾我別所の二宮先生の弟友吉、富次郎があずけられた先生のおかあさんの生家、川久保家の前を通り遺髪塚の前にて先生のお話しをおうかがいしながらしばらく休む。次は鎌倉時代の

の豪族、曾我城主太郎祐信を開基とし曾我一族及び曾我十郎・五郎の菩提寺として知られた城前寺において中食を取りながら兄弟が富士の裾野の討ち入り其の他のお話があり、これより光海の開窟の記念碑ならびに千代台遺跡などの予定を時間都合により変更、一路パスは栢山の善光寺に着いた。そこで北条氏康夫人、墓二宮家菩提の墓にお参りをすませ、百十五名の参加者と共に無事予定の山の尊徳記念会館に着いた終わりに北剛寺ならびに城前寺、其の他色々お世話になった方々に紙上をもって厚く御礼申し上げます。(内田記)

文苑
歳晚所感
若杉 一所
鳥兔々々似二水流
今非昨是幾搔頭
無レ奈人生窮与愁
困炉暖裡蔵將レ暮

浅井久美
伝へくる胸のぬくもり触
し子の荒れし掌わが頬を
ふと覚めし夜のもなかに
えくる時雨の音と幼き寝息

秋の史跡めぐり

九月十九日ちょうどこの日は尊徳祭参加事業として史跡めぐりが行なわれ、めぐまれた秋日よりに、小田

<p>あなたの洋品店</p> <p>はふや</p> <p>小田原幸町 TEL 2307</p>	<p>社長 神戸英次郎</p> <p>株式会社 小田原百貨店</p>	<p>きそば庵</p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>松坂屋製菓本舗</p> <p>小田原市十字二 電話五二七六番</p>
--	---	---	---

<p>高級陶器の店</p> <p>小田原市緑1~103 小田原銀座通り</p> <p>株式会社 江島屋陶舗</p> <p>TEL (0465) 5427</p>	<p>甘露梅 月の衣</p> <p>小田原駅前 正栄堂菓子舗</p> <p>電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店</p> <p>花田屋</p> <p>小田原銀座2 電話 3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う</p> <p>カメラの光輝堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5965 4859</p>
---	---	--	---

<p>プラスチック 成型加工</p> <p>東海化成株式会社</p> <p>取締役社長 滝本友信 電話小田原五九二七番</p>	<p>資生堂ホールセール(特契店) ベルマン, パピリオドル, マ ナー, キャロン婦人靴下代理店</p> <p>有限会社 山一商店</p> <p>小田原市井細田428 電話 3553</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社 星崎仲吉商店</p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>畳表・日用品 問屋</p> <p>茶利商店</p> <p>小田原市多古25 電話2341・2374</p>
--	---	---	---

<p>御料理 仕出し 御弁当</p> <p>株式会社 東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>純良医薬品</p> <p>株式会社 オタワラ薬局</p> <p>錦通り電三〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華</p> <p>松屋</p> <p>小田原錦通り 電話三三三三六</p>	<p>松葉 銘菓 千代 菊 甘露梅 銘菓(県指定の店)</p> <p>電話 2376</p> <p>集栄堂本店</p>
---	--	--	--

<p>平野商会</p> <p>平野久雄</p> <p>小田原市十字三 電話(〇四六五)二四四九番</p>	<p>写真</p> <p>イガラシ</p> <p>小田原市幸3 TEL 2534番</p>	<p>趣味の陶器</p> <p>江島屋</p> <p>小田原箱根口 電話 6602</p>	<p>齋志澤</p> <p>TEL 3131</p>
---	--	--	-----------------------------------

<p>印刷物は</p> <p>弘英印刷</p> <p>小田原市井細田八一 電話四、一〇八番</p>	<p>楽しい生活 明るい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社</p> <p>代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社</p> <p>大雄山線 運営事務所</p>
--	--	--	--